（別紙5－1）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【授業担当者】

所属/職名：農学部/准教授

氏　　名：岡本　繁久

授業科目名	国際感覚を持つバイテク人材育成
研修先 （大学・国・都市名）	モンクット王工科大学トンブリ校（タイ王国・バンコク）
研修期間	令和　5年　2月　13日　～　令和　5年　2月　24日

［研修の目的・概要］

本研修の目的は，学部学生に対して，バイオテクノロジー（以下，バイテクと略す）と関係が深い産業界，例えば，農業生産法人，食品業界，農産物や加工食品等の輸出入に係る国際貿易界で活躍できる人材になるための素養と実践力を身につけさせることである．このため，農業大国であり，農産物の加工が盛んで，且つそれらの産物を輸出することで外貨を獲得してきたタイ王国に短期滞在して，これに関するバイテク技術や，食の安全を確保するための国際規格・認証（GAPやHACCP等），国際慣習などを学ばせる．現地活動は，ホスト校（KMUTT）教員による講義と，座学を補完するための農園(農場)，食品工場，国立食品研究所などへの視察訪問からなる．上記に加えて，KMUTT学生と派遣学生との間で，問題解決型学習（PBL; Problem-Based Learning）などの学生交流活動を行うことで，英語を用いたコミュニケーション力の向上と両国の若人同士の人脈形成を促す．また，世界遺産や寺院，美術館，ローカルマーケットなどを訪問視察することでタイの歴史文化・生活習慣を学ばせる．

〔研修の成果〕　＊事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。

今年度は，6名の学部学生（農学部5名，法文学部1名；1年生3名，3年生2名，4年生1名）をKMUTTに派遣した．バイテク講義を受講するとともに，ココナッツ農園，ラン農園，味の素・アユタヤ工場，食品加工工場，国立食品研究所などを視察した．これらの活動を通じて熱帯・亜熱帯地域における農業や食品産業の問題点や，問題解決のためのバイテクの実践的利用例を学ぶことができた．学生交流の主要活動の一つとしてKMUTT国際コース学生と行った問題解決型学習（Problem-Based Learning, PBL）では，「日タイ二国間貿易を促進するための方策」というテーマの下，両校の学生がそれぞれの国の問題点を提示し，解決策を模索した．最後に派遣学生が，纏めた結果を両校教員とKMUTT学生の前で口頭発表した．KMUTT学生から数多くの質問が出たことから，今年のPBLは成功裡に終わったと考えられた．また，カルチャートリップとして，幾つかの寺院やチャクリ王朝について学べるラタナコーシン展示館，アユタヤ市内にある世界遺産・歴史記念公園などを訪れた．これらの訪問視察を通じて，タイ王国の成り立ちや王室と国民との関係性，タイと日本との長い交流史などを学んだ．ローカルマーケットでは現地の食材や食料加工品を実際に目の当たりにすることで現地の食文化について理解を深めるとともに，買い物を通じて市井の人々との会話と交流を図り，英語が通じなくとも意志疎通が図れることを学んだ．東南アジアの大都市バンコクを実際に肌で感じた経験や，KMUTT学生をはじめとするタイ人やその他外国人と行ったコミュニケーションは，海外で或いは地域で活躍できるバイテク人材を目指す派遣学生にとり貴重な財産になったと考えられる．この派遣では，姉妹科目である国際バイテク・リーダー育成に参加した修士学生1名を加えて，年齢も経験も異なる鹿大生7名が日本とは全く異なる環境下で，たとえ，短期間と言え，協力して活動したことは掛けがえのない経験となったと思われる．

〔今後の課題〕

今年度派遣学部生6名のうち4名（農学部1年生3名と法文学部3年生1名）は，バイテクに係る講義も受けたことはなく，専門知識も関連語彙も不足していたが，農学部所属の上級生2名や修士学生1名，教員2名の協力の下，理解に努め，彼らなりのレベルでのバイテクに関する知識と思考様式，実践的利用例を学んだと思う．次年度は，派遣学生を早期に確定させ，事前学習を充実させることでバイテクに関する知識水準を上げて行く必要がある．また，英語能力は個人間で大きく異なっていたが，KMUTTの学生のように，例え英語力が十分でなくとも，抵抗なく会話しようとする積極性も身に着けさせたい．このために，より上級の英語関連資格の取得を求めたり，グローバルセンター開講の語学プログラム受講を推奨するなど，英会話能力の向上に向けて派遣前から十分な時間を割いて自ら取り組んでもらう仕組みを考えたい．